

日蓮大聖人御書全集

はくまいいつぴようごしよ

白米一俵御書

新版
2052
ゝ
2054

はくまいいつぴようごしよ

白米一俵御書

こうあんき

弘安期

はくまいひとたわら

毛芋

一

俵

川

海

苔

一

籠

おん使

白米一俵・けいもひとたわら・こうのりひとかご、御つか

送

そうろう

いをもつて、わざわざおくられて候。

ひと

ふた

たから

いち

ころも

に

じき

きよう

人にも二つの財あり。一には衣、二には食なり。経に

い

うじよう

じき

よ

じゅう

うんぬん

もん

こころ

しょう

云わく「有情は食に依つて住す」と云々。文の心は、生

もの

ころも

じき

よ

住

もう

こころ

うお

ある者は衣と食によつて世にすむと申す心なり。魚は

みず

住

みず

いえ

き

ち

うえ

生

そうろう

ち

たから

水にすむ、水を宅とす。木は地の上において候、地を財

ひと

じき

しょう

じき

たから

命

もう

とす。人は食によつて生あり、食を財とす。いのちと申す

もの いっさい たから なか だいいち たから さんぜんかい へんまん
物は、一切の財の中に第一の財なり。『三千界に遍満する

も、身命に直するもの有ることなし』ととかれて、三千 さんぜん

大千世界にみてて 候 財も、いのちにはかえぬことに 候 だいせんせかい 満 そうろうたから 命 替 そうろう

なり。されば、いのちはともしびのごとし。食はあぶらのご 命 灯 じき 油

とし。あぶらつくればともしびきえぬ。食なければいのちた 油 尽 灯 消 じき 命 絶

えぬ。

一切のかみ・仏をうやまいたてまつる始めの句には、 いっさい 神 ほとけ 敬 はじ く

「南無」と申す文字をおき 候 なり。南無と申すはいかなる なむ もう もんじ そうろう なむ もう

ことぞと申すに、南無と申すは天竺のことばにて 候。 もう なむ もう てんじく 言 葉 そうろう

かんど にほん きみよう もう きみよう もう わ いのち ほとけ

漢土・日本には「帰命」と申す。帰命と申すは、我が命を仏

たてまつ もう

に奉ると申すことなり。我が身には分に随つて妻子・

けんぞく しよりよう きんぎんとう 持 ひとびと たから ひとびと

眷属・所領・金銀等をもてる人々もあり、また財なき人々

たから いのち もう たから 過 そうろうたから

もあり。財あるも財なきも、命と申す財にすぎて候財

そうら 古 しょうにん けんじん もう いのち

は候わず。されば、いにしえの聖人・賢人と申すは、命を

ほとけ 進 ほとけ 成 そうろう

仏にまいらせて仏にはなり候なり。

せつせんだうじ もう ひと み き 任 はちじ

いわゆる、雪山童子と申せし人は、身を鬼にまかせて八字

習 やくおうぼさつ もう ひと ひじ 焼 ほけきよう

をならえり。薬王菩薩と申せし人は、臂をやいて法華経に

たてまつ わ ちよう しょうとくたいし もう ひと て 皮 剥

奉る。我が朝にも聖徳太子と申せし人は、手のかわをは

ほけきよう 書 たてまつ てんじてんのう もう こくおう むめいし

いで法華經をかき奉り、天智天皇と申せし国王は、無名指

もう 指 焚 しやかぶつ たてまつ けんじん しょうにん

と申すゆびをたいて釈迦仏に奉る。これらは賢人・聖人

われ かな そうろう

のことなれば、我らは叶いがたきことにて候。

ほとけ 成 そうろう ぼんぷ こころざし もう もんじ

ただし、仏になり候ことは、凡夫は志と申す文字を

こころ得 ほとけ 成 そうろう こころざし もう 何 ごと いさい

心えて仏になり候なり。志と申すはなに事ぞと委細

勘 そうら かんじん ほうもん かんじん ほうもん もう

にかんがえて候えば、觀心の法門なり。觀心の法門と申す

何 ごと 尋 そうら ひと 着 そうろうころも

はなに事ぞとたずね候えば、ただ一つきて候衣を

ほけきよう 進 そうろう み 皮 剥 そうろう 飢

法華經にまいらせ候が、身のかわをはぐにて候ぞ。うえ

世 放 今 日 いのち 繼 もの 無

たるよに、これはなしてはきようの命をつぐべき物もなき

そうろう 御 料 ほとけ 進 そうろう しんみよう

に、ただひとつ 候ごりようを仏にまいらせ候が、身命

ほとけ そうろう そうろう やくおう 臂 焼

を仏にまいらせ候にて候ぞ。これは、薬王のひじをや

せつせんどうじ み き 給 そうろう 相 劣 くどく

き雪山童子の身を鬼にたびて候にもあいおとらぬ功德に

そうら しょうにん おん じく 養 ぼんぷ り

て候えば、聖人の御ためには事供よう、凡夫のためには理

供 養 しかん だいしち かんじん だん波羅みつ もう ほうもん

くよう、止観の第七の観心の檀はら蜜と申す法門なり。

道 せけん じほう そうろう こんきようみようきよう

まことのみちは世間の事法にて候。金光明経には「も

ふか せほう し すなわ ぶつぼう 説 ねはんぎよう

し深く世法を識らば、即ちこれ仏法なり」ととかれ、涅槃経

いつさいせけん げどう きようしよ みな ぶつせつ げどう せつ

には「一切世間の外道の経書は、皆これ仏説にして外道の説

おお そうろう みようらくだいし ほけきよう だいろうく

にあらず」と仰せられて候を、妙楽大師、法華経の第六の

まき いつさいせけん ちせいさんぎよう みなじつそう あいいはい きようもん

卷の「一切世間の治生産業は、皆実相と相違背せず」の経文

ひ あ こころ 顯 そうろう かれがれ にきよう

に引き合わせて、心をあらわされて候には、彼々の二経

じんしん きようぎよう か きようぎよう こころ 浅

は深心の経々なれども、彼の経々はいまだ心あさくし

ほけきよう およ せけん ほう ぶつぼう よ 知

て法華経に及ばざれば、世間の法を仏法に依せてしらせて

そうろう ほけきよう せけん ほう ぶつぼう ぜんたい しやく

候。法華経はしからず。やがて世間の法が仏法の全体と釈

そうろう

せられて候。

にぜん きよう しんしん こころ ばんぼう しょう たと こころ

爾前の経の心々は、心より万法を生ず。譬えば、心は

だいち そうもく ばんぼう もう ほけきよう

大地のごとし、草木は万法のごとしと申す。法華経はしから

こころ だいち だいちすなわ そうもく

ず。心すなわち大地、大地則ち草木なり。

にぜん

きようぎよう

こころ

こころ

澄

つき

こころ

清

爾前の経々の心は、心のすむは月のごとし、心のきよ

はな

ほけきよう

つき

こころ

はな

こころ

きは花のごとし。法華経はしからず。月こそ心よ、花こそ心

もう

ほうもん

よと申す法門なり。

知

これをもつてしろしめせ、

はくまい

はくまい

白米は白米にはあらず、すな

いのち

わち命なり。